

## 気づいたら？ 今、直ぐ実践でしよう！

上廣哲治

季節は弥生三月。草木がいよいよ生い茂る月を迎えました。わが会にとりましても、いよいよ種蒔きの季節。春季大会が始まる月となりました。

とは申せ、種を蒔くためには、教えに学んで実践へと向かうための「気づき」がなければ、種の蒔きようがありませんし、気づいても、即、種を蒔かなければ、いつまでたっても芽は出ません。そこで今月は、「気づき即行」の教えについて考えてみましょう。

数年前に予備校講師の林修さんが、「いつやるか？」と問いかけ、「今でしょ！」と答えたコマースヤルが評判を呼び、その年の流行語になりました。

「思い立ったが吉日」という言葉がありますが、誰もが心の底で、思いついたら直ぐにやらなければならぬと思います。思っているのですが、それを実行に移すのがなかなか難しい。林さんの言葉は、そうしたジレンマをズバリと表現したので、人々の共感を得て、流行語にもなったのでしよう。

わが会の「気づき即行」は、まさに「いつやるか？ 今でしょ！」の実践であります。ただ、この言

葉には、決定的に欠けているものがあります。それは、「気づき」です。「いつやるか？ 今でしょ！」はいいのですが、その前に「何をするのか？」という「気づき」がなければ、今、直ぐに何かをするにしてもやりようがないからです。「気づき」は、「朝の誓」にある「今日一日 気付いたことは 身がるに直ぐ行きます」に基づいた教えです。「朝の誓」では「気付き」と漢字をあてますが、『実践倫理講座・天の巻』では、「付」を「づ」と平がなで表記しています。あえて表記にこだわるならば、「気付き」が日常的な機転や発見であるのに対して、「気づき」は日常的な気付きを含めて「ひらめき」や「インスピレーション」「予感」や「改心」などを包み込む言葉といえるでしょう。「わかった！ こうすれば問題が解けるぞ」というひらめきから、「何か悪いことが起こるかもしれない」という予感、「ああ、自分が悪かった。心を入れ替えよう」という改心などの内容を含んでいるということです。

では、なぜ、私たちは気づくことができるのでしょうか？ 気づきとは一体どのようなものなのでしょう？ 『実践倫理講座・天の巻』では、「気づきは大自然の摂理を直感的にキャッチする叡知」「天から与えられる啓示」とあります。これを身近な例に当てはめて考えてみましょう。

例えば、人間関係や会社の仕事などで問題を抱えて、一人悶々と悩むことがあります。どのように解決したらいいのか、どのように行動したらいいのか、いくら考えても答えが出ず、さまざまに思いを巡らす日々を過ごしているような時です。すると、ある時突然、フツとすべてがわかる瞬間が訪れます。突然、解決策が見えてくる。これが「気づき」です。「ああ、自分が悪かったんだ。あまりにも身勝手な考えすぎだった」とか、「思い切って、余分な部分を整理すれば解決する」などと。ニュートンはリンゴが木から落ちるのを見て、引力の存在に気づいたといえます。気づきは前触れもなく、直感的に訪

れるのです。まさに「天から与えられる啓示」なのです。

最近の脳科学では、人間が何事かの答えを求めて意識の上で考えつづけていると、同じことが無意識の領域でも進んでいて、ある時、フツとその答えが意識のレベルに浮かび上がってくるといいます。これが「気づき」です。まさに「大自然からの贈り物」なのです。

ところが、せっかくの気づきを生かせない人がいます。「自分が悪かった」と気づき、反省の機会を得たのに、「それでも悪いのは相手のほうで、私は間違っていない」などと、「我」を張って気づきへの感覚を鈍らせ、実践に至る道をふさいでしまうのです。このように我によって心を曇らせてしまうと、せっかくの気づきを逃してしまいます。気づきを感じとるためには、我を捨てて、「素直」でなければなりません。

気づきを得たら、即、実践です。せっかく素直になった今この時を逃してはなりません。今の自分のできることを、今、直ぐ実践する。必ずやり貫こうと決心して、できるまでやりつづけることです。

なぜ「気づき即行」か？ それは気づきが一回だけのもので、再び訪れるとはかぎらないからです。与えられた貴重なチャンスを確実に実践でモノにする。見す見す逃すようでは「今日一日」の実践精神に反する態度といえるでしょう。

このように、気づいたら直ぐに実践しなさいと申しますと、「その気づきが正しいとわかってから実践したほうがいいのではないのでしょうか？」と仰る方がいます。確かにもっともらしく聞こえます。でも、よく考えてください。実践する前にその是非を判断することができずでしょうか。実践をしなれば考える手がかりがないのですから、いくら考えても答えは出ません。答えは実践の中にあるのです。

ニュートンも、引力が本当に存在するかどうかはすぐには判断ができなかったはずですが、彼は、その気づき、直感を信じて研究を重ね、その結果、「万有引力」を発見したのです。

林さんは、著書の中で次のように書いています。「僕は過ちの多い人間だという自覚があります。しかし、それに気づいた瞬間に何のためらいもなく直せる人間である」と。そして、論語をひいて、「過ちては改むるにはばかりることなかれ」の教えを、誰よりも実践したという自負を抱いているといえます。過ちに気づいた時、「いつ正すか？ 今でしょー」を、その通りに実践していたのです。

実践に時を選ばずということがこのような話があります。徳川家康から家綱までの四代の将軍に儒教の教えを講義した儒学者の林羅山の家に、ある年の大晦日、一人の少年が訪ねてきました。「先生、私は学問に励みたいのです。ぜひ、来年から私に授業をしてください。どうぞお願いいたします」と頼んだというのです。羅山は、「うむ」とうなずくと、こう答えました。

「君はすぐにも勉強したいのだから？ 年に区切りがあっても、学問には区切りはない。さあ、今からすぐに始めよう」「来年から」などと遠慮することはない、やる気が湧いた時にすぐさま始めるべきだということです。「即ち除日に講を起す（即除日起講）」、大晦日といえども思い立ったらすぐに勉強せよ、ということ。まさに「気づき即行」です。

さて今月の実践課題です。気づきはいつ得られるかわかりません。ただはつきりしているのは、実践をしていない人に気づきはないということです。課題に向けて善く考え、愚直に教えを実践している時、気づきは訪れるでしょう。その気づきを感じとれるように我を捨てて素直な心で「今日一日」を生き貫くのです。その上で、気づいたら？ 今、直ぐ実践でしよう！

## マンガ、アニメ、ゲームは日本の誇る文化

土屋恵一郎

日本のマンガやアニメ、ゲームは海外でも人気があります。しかし、この現象は単なるブームで、能や浮世絵、茶道、華道のようなすぐれた文化に発展することはないと言う人もいます。日本のサブカルチャーを後押しする明治大学学長の土屋恵一郎さんに、マンガとアニメ、ゲームの展望についてうかがいました。

### にわかに関心を引き起こったマンガ図書館構想

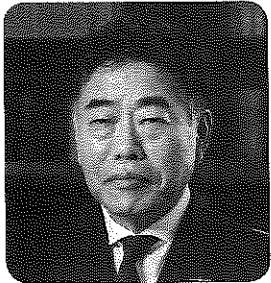
私は昨年4月に、母校・明治大学の学長に就任した。その際、大学のブランディング方針の一つとして打ち出したのが「日本のサブカルチャーの研究と世界への発信」である。サブカルチャーと

一口にいっても、ファッションやコスプレ、現代アートや小劇団の芝居などと幅広いが、現在、本学が最も力を入れているのはマンガとアニメ、そしてゲームである。

ことの起こりは今から10年ほど前。明治大学OBでコミックマーケット(マンガ同人誌の展示即売会。通称「コミケ」)の創始者・米澤嘉博よねざわ かつひろ氏が

亡くなり、ご遺族から氏が生前に集めたマンガやマンガに関する資料約14万冊を大学に提供するので活用してもらえないか、というお話があった。

この提案は学内で検討され、東京・新宿で現代マンガ図書館を運営されていた内記稔夫うちのき しのぶ氏とコミケの運営母体に相談したところ、もし明治大学がマンガを集めた図書館を創設するなら、双方の所有するマンガを寄贈、もしくは貸してくれるという。米澤氏の14万冊と現代マンガ図書館所蔵の約18万冊、コミケが持っている過去のコミケ作品展品約200万冊。全部合わせれば、相当の数になる。



●1946年東京都生まれ。明治大学文学部文化研究所特別顧問。明治大学法学部卒業、同大学大学院法学研究科博士課程単位取得満期退学。同大学教授、学部長などを経て2016年より現職。専攻は法哲学だが、能の研究、音楽、ダンスの評論でも知られる。著書は『能、世阿弥のために』『正義論/自由論—寛容の時代への予言ペンサム 快楽主義者の予言した社会』など。

マンガは戦後日本のサブカルチャーの中心である。これを保存・利用することは歴史的にも学問的にも大いに意義があるということで、「東京国際マンガミュージアム」構想がスタートした。計画を進めるうちに、マンガと同様に重要なサブカルチャーであるアニメやゲームの資料を体系的に収集している施設がどこにもないことがわかり、アニメ作品の原画やセル画、昔のゲーム機の基盤や業務用ゲーム機なども同館で展示することになった。

### サブカルチャーを研究する学部を創設しよう

私の専門分野は法哲学であり、それ以外では長年、能を中心とした演劇研究をしてきた。マンガ、アニメについてはまったくの門外漢である。

それにもかかわらずマンガ図書館設立の旗振り役となったのは、マンガなどのサブカルチャーが日本のみならず世界各国に大きな影響を与えており、今後とも発展する可能性があると思ったからだ。